

# 気まぐれな悪魔によるデジタル世界

ガルGC

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ネット犯罪を犯していた主人公がいつものようにパソコンで二次創作を読んでいると、悪魔によって強制的に地獄に連れてこられてデジモンの世界に介入することになった。

目次

第1話	1
第2話	7
第3話	12
第4話	17
第5話	27
第6話	33
第7話	40
第8話	49
第9話	57
第10話	63



これじゃ面白くない。

あーあ、俺がもしこの二次創作の中にいたらな……。  
それこそまさに夢物語、叶うはずもない。

「天国でも、地獄でもいいから。何か面白いことねえかな」  
ぽつりと呟いた言葉、誰かに聞かせるわけではなく、独り言のよう  
に呟いた一言なの  
だが、その言葉は確かに届いた。

『なら、俺が連れてってやろうか?』

「……………へ?」

瞬間。

俺の意識は暗い闇の底に落とされた。

ゴツンッ!

「いだっ!」

頭にいきなり襲いかかった衝撃に目を覚ました。

「いてて……」

後頭部を抑えながら、目の前を見て一言。

「ここは、どこだ……?」

視界に広がるのは黒い世界。

光の存在しないを否定するような闇の空間。

「ここは、地獄なのか」

「ああそうだ」

闇の空間から声が響くと、何かが現れた。

現れたのは長身の男だ。

一瞬その容姿にほっとしてしまいが、すぐに消えた。

「ようこそ。我らが地獄へ」

姿形は人であるが、赤い髪とその間から生える一本の角。

人間とは思えない鋭い目つき。そしてここが地獄ということとは。

「こいつはまさか。」

「お前、悪魔か？」

「そうとも、俺は悪魔のアヴェリタ・ディオ。気軽にアヴェリタと呼んでくれて構わないぜ？」

「そうか……なら、アヴェリタ。俺は何で地獄にいるんだ」

「簡単な質問だなおい。んなもん、悪さをしたからに決まっているだろ」

「人間、だれだって悪さをするだろ？ 何で地獄に落ちなきやいけない」

「お前、反省の色がまるでないな。ネットで何回も犯罪を起こしているのによ」

「ネットの犯罪？ ネットの場合、ばれなきや犯罪にならないだろ？」

「うわ、最低な主張だな」

うるさい。世の中そんなもんだ。

「それで、俺は何で地獄に落とされる？ まだ生きていた筈だろ」

現にさつきまでパソコン弄ってたし。

「ああ生きてるぞ、今のお前は肉体まるごと地獄にいるからな。生きてるって言えば生きているかもしれないな」

「わかんないのかよ」

役立つないなコイツ。

「うるせえ、少しは黙りやがれ。今から説明してやるから耳の穴をよしくかっぽじって聞きやがれよ？」

「やだね」

「聞かなきや針山地獄に落とすぞ」

「よし、聞いてやろうじゃないか！」

流石に針山地獄は命を落としかねん。

「偉そうだなおい。まあいい、簡単にだが説明してやると……お前、確かおもしろえことをやりたいって言ったよな」

「ん？……確かに言ったが、それがどうした？」

「俺が叶えてやるよ、介入って形でな」

「介入？」

転生や憑依じゃなくて？

「転生や憑依は天界の奴らができる手段だ。俺たち地獄の奴らは介入って形で無理やりお前を物語の世界にねじ込む」

「なにそれ、俺ってねじ込まれるの？」

「まあな」

なるほど、俺を物語に介入させてくれると……

「ごめん、無理」

「……………はあ？」

「いやいや、はあ？じゃなくて無理なんだって。俺は物語に無理やりねじ込まれて主人公になるのは絶対にやなの！チート性能で主人公たちと共に戦うのは原作壊しておもしろみもなくなるし、そうでなくても物語の内容を変えそうだから絶対に介入なんてしたくねえぞ！このアヴィリタやろう!？」

「？やけくそなのか馬鹿にしてるのかよくわからないセリフだな」

チクショーッ！

「だがまあ、安心しておけ。俺はお前を正義の味方などにするつもりはない」

「……………正義の味方にしない？」

「悪魔が人間を正義の味方にするかよ。俺はな——

——お前を最高の悪者にしてやる」

「最高の、悪者……………」

何だそれは、聞いたただけでも興味をそそるその言葉は。

「なあ、なってみないか。最高の悪者によ？」

これが俗に言う悪魔の誘惑というわけか。

なるほど、こいつは……

「いいぜ。なってやるよ。最高の悪者によ！」

……………最高の面白さじゃねえか！

「カカカカッ！契約は成立だな！なら、早速だがお前の介入する世界を教えておく。お前が介入するのは“デジモン”の世界だ。デー

夕を得意とするお前にとつたら、最高のスタートじゃないか?」

「デジモン?あのデジモンか?だったら大丈夫に決まってるだろ!」

「そうか、そいつは楽しみだ」

デジモンの世界なら何も問題はない。

実質直接対決がない限り負ける気がしない。

「パートナーデジモンはどうする?王道の線なら、ドルモン、コロナモン、ルナモンの三匹の内のどれかだが」

「んー……その三匹以外のデジモンでもいいんだろ?」

「別に構わん。介入の関係上、成長期に限定するがな」

成長期限定か……

「なら、——モんで頼む」

「……お前つて、意外と最低なデジモンを選ぶんだな」

褒め言葉として受け取っておく。

「パートナーデジモンは決まったな。他にほしいものはあるか?」

「——とデジモンを多く収納できるデジヴァイス、それとデジタルワールドを行き来することができるようにしてほしい」

「なんだ最後はともかく、パートナーデジモンがいるのに、ほかのデジモンもほしいのか?つくづく最低だな」

「最低でいいんだよ。俺は最高の悪者だからな」

「確かにな」

これで一応だが準備は整った。

「それじゃ、俺をデジモンの世界に介入させてくれ」

「おう。いいぜ」

アヴイリタが手を上げると闇の空間から投石器が現れた。

「……おい、なぜ投石器がここにある?」

「んなもん、飛ばすからに決まっているだろ」

「飛ばす!」

落とし穴とか意識を飛ばすじゃなくて?」

「天界は上の存在だから落とし穴で行かせれるが、あいにく地獄は下にあるものだからな。こうやって飛ばさなければ介入することができないんだ」



初めて知ったよその事実。

「てなわけだ……大人しく、逝ってきやがれ!!」

「バカヤロオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!」

俺の声はドツプラー現象によって徐々に声が小さくなっていき、やがて聞こえなくなった。

## 第2話

目が覚めると、目の前に絨毯があった。どんな介入してんだよ。

天井じゃないのか。天と地が逆だ逆。

とりあえず体を起こして周りを確認する。

パソコンとベット、後は机とキツチン。

割と普通だ、悪魔が用意した割には。

とりあえずアヴィリタに頼んだものがあるかを確認する。なければ即効でBAD ENDになりかねん。

部屋を探せばすぐに見つかり、デジヴァイスの中にはしっかりとパートナーデジモンもいる。型が古いせいかドット型で分かりにくい。

次に確認するのはある意味もつとも重要と言えるパソコン。

こいつは簡潔に言えば、一番豪華だった。

元の世界のスーパーコンピュータ並みの性能をもっているぞ。

てか、いま思ったら年齢がかなり下がっていた。

原作に合わせなければいろいろと厄介だからか？

ま、ある程度の状況確認ができたところで。いっちょ試みますか。  
「デジタルゲート、オープン」

パソコンにデジヴァイスをかざすと、俺はパソコンの中に吸い込まれた。

\* \* \* \* \*

目を開けると、目に砂が入った。

最悪の開始だな色々。

俺が悪いことをしたか？してないだろ？今はだけど。

「てか、こいつはどこのだよ」

あまりにも砂しかないからつまらんぞ。

行き先を考えてくれればよかったか？

とりあえず後先考えず動いてみるか、現実世界と比べて時間の進みは遅いからな。気長に行動できる。

「まったく、面白いもんはねえかなー……おっ」

砂漠をしばらく歩いていたらデジモン発見。

黒い角と黒い鎧を纏った四足のデジモンだ。

デジヴァイスで確認すれば、あれはモノクロモンというデジモンらしい。

成熟期であるが、俺には関係ないな。

てか、無視する。戦うのも面倒だ。

「他にデジモンいないか、ん？」

俺がその場を離れようとするのでデジヴァイスが光だし、中から俺のパートナーデジモンが現れる。

おいおい、何勝手に出てきてるんだよ。

『グルウウウウウウ』

出てきてそうそう凶暴だな、俺のパートナー。

「てか、デジヴァイスに戻れ」

『グラアアアアアア』

俺の指示を無視して勝手に飛び出すパートナーデジモン。

そのままモノクロモンに突っ込んでいった。モノクロモンはその接近に気づき遊撃するため口を開けエネルギーを溜めだした。必殺技の“ヴォルケーノストライク”を放つためだ。モノクロモンはエネルギーの溜まったヴォルケーノストライクを放つと、俺のパートナーデジモンは空中に飛ぶことで躲し、手にあたる爪を伸ばしてモノクロモンのダイヤモンド並みの強度を持つ鎧をいとも簡単に貫いた。

比喩ではない。現実である。

やがて体を貫かれたモノクロモンはその体を0と1に分解され、消滅してしまった。だが、分解されたデータの塊は大半が俺のパートナーデジモンに吸収され能力を向上させる。

成熟期と戦って普通に勝っちゃったぜ、成長期なのに。

その後も、俺はパートナーである自分のデジモンに数々の成熟期と戦わせた。

モノクロモン：六体、クワガーモン：八体、シードラモン：五体の計十九体の成熟期を倒し消滅+吸収することができた。

最初のモノクロモン戦以外はなんとか俺の指示に従ってはくれた。大体のデジモンのデータを集めることができたので、俺はパートナーをデジヴァイスの中に戻し、現実の世界に戻るためデジヴァイスを上げる。

「あれ？人間？」

「ん？」

声を掛けられたので後ろに振り向けば、何故か人間とデジモンがいた。

「だれだ、お前」

「それはこっちの台詞でもあるけど。僕は小宮<sup>こみやせいじ</sup>星之君は？」

「俺か？名乗らないからパス」

「ええ!？」

てか、だれ？

初対面で馴れ馴れしいな。

「おい、星之が話しかけてるんだぞ！名前ぐらい言ったらどうだ！」

「あ、ちよつとコロナモン」

小宮の隣にいるコロナモンってデジモンが怒っているが、意味が分からん。

「ごめんね、驚かせちゃって。こっちはコロナモン。僕のパートナーデジモンさ」

「パートナーデジモン？」

コロナモンに視線を向けて鼻で笑った。

「はっ」

「な、なにが可笑しいんだよ！」

「べつに、何だか弱そうなデジモンだなと思ってな」

「何だ?!？」

「コロナモン、落ち着いて！」

短気だな、このコロナモン。

「何か用でもあるのか」

「うん、君を見かけてさ。ちよつと聞きたいことがあって」  
「聞きたいこと？」

「うん、君つて。“転生者”かな？」

「転生者？もしかして、こいつは転生者か。」

「神様に転生してもらつて嬉しかったんだけど、一人じゃ心細くて」

「確かアヴィリタは神が人を転生させた世界に介入させたから、転生者がいることはわかつていたがこんなに早く出会うとは。」

「ねえ、僕と一緒に原作が始まるまで強くなろうよ」

「転生者に出会つた場合、その対応決まっている。」

「星之がいつてんだ、少しは反応したらどうなんだよ！」

「やめてつたら、コロナモン。僕は気にしてないから」

「何事も冷静に、物事を行うなら残酷に。」

「えつと、返事をしてくれないと困るな。名前も教えてほしいけど」

「そうだな、名前を教えないといけないよな」

「やるなら徹底に、過程は迅速に。」

「俺の名は荒喜操練<sup>あらかきそうれん</sup>」

「へー、何て呼んでいいかな？」

「好きに呼んでいいぜ」

「なんだつて俺は——」

「……ふっ！」

「星之イイイイ！」

「ま、呼べるもんならな」

「——最低最高な悪者だからな！」

「てめえ、何をしやがはあっ！」

「デジヴァイスから出ていたパートナーデジモンの爪がコロナモンの胸を貫いた。もう片手で貫いている小宮を放り投げる。」

「うっ！」

「星之っ!?!」

「やれ」

「コクリと黙つて頷くと、コロナモンの体は徐々に分解され吸収されていく。」

「ぐわああああああああああああ!!」

「コ、コロ……ナモン!」

吸収されるコロナモンを涙を流しながら顔を歪ませる小宮。俺はコロナモンを放っておき小宮に近づいた。

「よお、気分はどうだ?」

「どおして……こん、なこと?!」

「どうしてか?そんなもん決まっているだろ」

パートナーデジモンは完全にコロナモンを吸収し終わると、俺の隣に近寄った。

「——俺が最高の悪者だからよ!」

俺は手を下す、それは攻撃の合図。

デジモンの爪が小宮の体を再び貫く。

そこから手を横に動かす、それは吸収の合図。

このデジタルワールドは全てがデータの塊。つまり、この世界では人間《・・》もデータの塊の一つにしか過ぎない。

ゆえに彼の体からは血が流れず、データとなって吸収された。

さて、現実の世界に戻るとしうか。次の戦闘における準備をしなければ。

俺はデジヴァイスを使い、現実世界に戻った。

小宮が吸収されいなくなった場所には、一つのデジヴァイスが点滅していた。

### 第3話

さてさて、あれから数年。

デジタルワールド内で数十年過ごした現在。

原作がすでに始まり出そうとする一九九九年八月一日。

俺はパソコンであることをしていた。

それはデジヴァイスを経由してのパートナーデジモンからこれまで吸収したデジモンのデータを回収する作業だ。

俺が何故こんなことをするのか、それはアヴィリタに頼んだ多くのデジモンを収納するという願いに関係ある。俺のパートナーデジモンは必殺技の能力で相手のデータを己のデータとして吸収する力を持っている。それはつまり、戦ったデジモンのデータを手に入れることに繋がり、それを分析すれば戦ったデジモンを復元することができる。

この期間で倒したデジモンは、復元するために同種のデジモンばかりを倒しできるだけ多くのデータを集めていたのだ。

「モノクロモンのデータが七十七体分か……復元すれば、およそ十体ほど」

画面に映るデータを見ながら、他のデジモンのデータを閲覧した。

シードラモン：六三体、およそ九体分。

ティラノモン：三一体、およそ三体分。

グレイモン：二十体、およそ二体分。

クワガーモン：八九体、およそ十一体分。

カブテリモン：五十体、およそ五体分。

他にも偶に出会った転生者たちのデジモンのデータがあるが、それは少なすぎるのでなしだ。

「ふむ、どうするかな」

モノクロモン、シードラモン、クワガーモンはともかくティラノモン、グレイモン、カブテリモンのデータが少ない。これじゃ例のプログラムを入れたとしても完全にはならないか。

だとしたら、モノクロモン、シードラモン、クワガーモンを例のプ

ログラムを核としてデータを圧縮。展開後に形を生成して、俺のデジモンとして使う。

ティラノモン、グレイモンの二体はデータを混合する。新しいデジモンとして誕生させてみるか。

カブテリモンのデータは元の核を使用してデータを圧縮する。

「よし、これでいこうか」

新しく誕生させる関係上、生まれるデジモンは成熟期ではなく成長期として誕生するがあまり問題ない。

デジモンは数ではなく質だ。

二体の個体より、圧倒的な一体の個体を生成する。

その命を俺の手で作ってやろう、俺の手足として。

「さて、始めるとしようか」

——Xプログラム、起動。

\* \* \* \* \*

「デビモン、お前の闇の力は大きくなりすぎた。この世界から消し去らなければならぬ」

ファイル島の上空に舞うエンジエモンは、デビモンを前にしてそう言った。

原作はすでにファイル島編の終幕。

エンジエモンは選ばれし子供たちを守るため、グレイモンたちから進化の力を受け取り、自信に宿る聖なる力を高めた。それはすでにデビモンの闇の力を上回る力。

エンジエモンは聖なる力の全てを拳に集中し、デビモンに向け一気に放った。

「ヘブンズナックル！」

黄金色の光がデビモンの体を貫いた。

デビモンの体は細かな粒子となってファイル島の上空に消えた。

また、エンジエモンもその体が粒子となって崩壊していく。限界以上の力を使ったため体が耐え切れなかったのだ。



「すまない、タケル」

「エンジエモン……」

タケルは消えていくエンジエモンに対して呟くことしかできなかった。

「きつと、また会える。君が望むなら」

「エンジエモオオオン！」

エンジエモンは体が粒子となって消えた。

だが、彼の命がなくなったわけではない。

タケルの前にエンジエモンの羽が集まり、一つ大きなデジタマになった。

「パタモンはデジタマからやり直すんだ」

「大事に育てれば、またきつと会えるよ」

タケルはそつとデジタマを抱きしめた。

(これで大丈夫だったのでしょか)

選ばれし子供たちの中で、光子郎は一人静かにそう考えていた。デビモンを倒したことで本当に平和になったのか。

僕たちはいつになったら現実の世界に戻れるのか。

それに、僕たちはどう行動すればいいのかわからない。

(僕は一体どうすれば……ん?)

光子郎は首を上げ、デビモンが消えた空を見ていたら何か空を移動していたのが見えた。一瞬だったため形まではわからなかったが何かがあった。

(今のは、一体……?)

光子郎は考えようともう一度空を見上げようとすると、背中に衝撃が襲った。

「何を考え込んでんだよ、光子郎！」

「うわあ！」

不意に襲った衝撃に思わず体勢が崩れそうになるが何とか戻る。

「な、なにするんですか！危ないじゃないですか」

「ん、悪い悪い」

「まったく、やめてくださいよ竜二さん<sup>りゅうじ</sup>」

光子郎の背中を押したのは、上家竜二<sup>かみや</sup>。

太一と同じ五年生で、サッカー部の親友らしい。

彼のパートナーはドルモンという紫色のデジモン。

進化形はドルガモンと飛行能力を持つ強いデジモンだ。

「何か悩んでいるようだからさ、俺でよければ聞け？」

「いえ、大丈夫です」

「そうか？なら、よかった」

「心配させてすみません」

「いいっていいって、気にするな」

僕は竜二さんとの会話をやめ、再び空を見上げるが何もなかった。

(さっきのは、何だったんだろ?)

光子郎はもう一度考えたが、やめた。

ここで考えてもしかたない、今はできることを考えよう。

\* \* \* \* \*

「まったく、危うく見つかるかと思った」

そう呟くのはこの荒喜操練。

デジモンのデータを取るためファイル島に来ていたが、デビモンがちょうど倒されていたのでデータを回収させてもらった。直接倒したわけではないので回収したデータが少ないが、同族のデジモンのデータが手に入ればなんとかなる。

「しかし、すでにファイル島での話が終わっているとは」

ちらっと選ばれし子供たちの姿を確認したが、二人多かったな。男と女と一人ずつ。あれは転生者か。ま、直接の邪魔をしない限りは殺しはしないがな。

「そうなるよ、あいつらが次に行くのはサーバー大陸か」

タグの紋章集めの旅になるみたいだが、俺にも紋章はあるのかね？正直な気持ちだ。なんだかイレギュラーなことには最初っからなっているみたいだし、サーバー大陸で一度接触してみますかね。

あいつらの実力も知りたいからな。

## 第4話

選ばれし子供たちがサーバー大陸に向かうなか、俺は現実の世界に戻り先ほど回収したデビモンのデータを確認していた。

「うーむ、思考のデータだけないな」

思考のデータとは、人間で言うところの脳にあたる部分のところだ。ファイル島で回収したデータは体を形成するデータのみで、思考のデータはどこかに飛んで行つたらしい。データの容量自体は多かったので復元する分には問題ないが、思考のデータがないため人形と同じようになってしまう。それじゃ戦闘もすることはできないのでデビモンの復元は今のところ断念だな。

「まったく、デビモンの復元はできないのか」

即戦力になりそうだったのになー。

『おいおい、俺たちじゃもの足りないって言うのかよ？それって酷くないか!』

『そんなことを言うのは、あまりよくありませんよ？マスターに失礼です』

『我は口を挟まん』

『……………』

『お前は何か言えよ!』

部屋に響く五つの声。

その声の主たちは、部屋の中ではなくデジヴァイスの中から発せられていた。それはこの前復元させたデジモンたちである。

『大体よ、俺たちは戦うために生まれてたんだろ！早く戦わせろよゴラァー!』

『ちよ、ちよつとちよつと!?!ここでそんなに怒っても、戦えるわけではないでしょ。ここはマスターの指令があるまで大人しく待つのが――』

『だあああまらつしやい、このペタンペタン野郎!』

『ペタンペタン野郎!?なんですかそれは!いくらなんでも怒りますよ?』

さつきから犬猿の仲のように離れているこの二体は、口調が乱暴であるのがコマンドラモンで、紳士的に対応しているのがベタモン（X抗体、以降Xとする）である。

コマンドラモンは凶暴であるティラノモンとグレイモンのデータを混ぜたせいか、かなり性格が凶暴になってしまった。

ベタモン（X）の方はシードラモン自体が大人しいデジモンであったためコマンドラモンとは正反対な紳士的な性格。

『……………』

『おい、お前らは少しは話すようにしろよ。ベタモン（X）とコマンドラモンがさつきから言い争っているのに何でお前らはこんなにも物静かなんだよ』

『我、汝と話すことなし』

『いやいやいやいや、何で？話すことは色々あるだろ。今後のこととか、これからどう連携とるかあるだろ？』

『汝よ』

『ん？なんだよ』

『ウザし』

『唐突に何だよ！』

『……………（笑）』

『お前はコツソリ笑うんじゃねえよ！』

次に、我や汝と言っているのはモノクロモンのデータから復元したゴツモン（X）。元々が堅いデジモンだった所為か何故か堅物な性格に。

そして一番言葉を発していないのはカブテリモンのデータを圧縮し復元したのはコカブテリモン。圧縮した分この中では一番のパワーを持っているが口数が少なく、滅多に話さない。

最後にゴツモン（X）とコカブテリモンに声を掛けているのはコクワモン（X）。クワガーモンのデータから復元した。性格はこのメンバーの中ではかなりまともで、主にゴツモン（X）とコカブテリモンへのツツコミ役が殆どである。

皆、俺がXプログラムを核として新しく作り上げたデジモンたち

だ。

まあとりあえず。

「お前ら、少しは静かにしろ」

『あああ!?!俺は静かにしろだと!俺は早く戦いたいんだよ!!』

『コマンドラモンさん!?!マスターに銃口を向けないでください!』

『我、コマンドラモンに同意する』

『……………(コク、コク)』

『同意したいならお前も声出せよ!』

コマンドラモンよ、デジヴァイス内にいるお前が俺に発砲しても当らんぞ。

「ま、安心しておけコマンドラモン。もうすぐ戦闘できるからな」

『マジかよ!?!シャツハー、テンション上がるぜえ!!』

『や、やめてコマンドラモンさん!僕、四足歩行だから避けにくいんですよ!?!』

『我、汝の攻撃は効かぬ』

『……………(コク、コク)』

『俺は体が機械だから』

『私だけピンチ!?!』

コマブテリモンの体も硬いからな。コマンドラモンの銃撃は効かないか。

「たく、お前らは……………」

個体としては強いのだが、どうにも全体の仲が微妙だな。

マウスを動かし、パソコンの画面に選ばれし子供たちがいるデジタルワールドの映像を映し出す。そこに映るはサーバ大陸の砂漠地帯を歩く九人の選ばれし子供たちが映っていた。

「さーて、一度挨拶でもしてこようかね」

俺は笑みを浮かべながら、そう呟いた。

\* \* \* \* \*

荒喜操練がパソコンを通じて選ばれし子供たちを眺めててからし

ばらく。

選ばれし子供たちはサーバー大陸に着いてそうそう、エテモンによる奇襲に遭っていた。エテモンによる奇襲を何とか逃げ切ることができた選ばれし子供たちはその途中で太一の紋章、勇気の紋章を手に入れることができた。

「何だ何だ、みんなしつかりしろよ。俺たちには紋章があるだろ」

ゆえに、選ばれし子供たちの中で唯一紋章を手に入れた太一は慢心していた。

「太一、あまり張り切るな」

「竜二、何言ってるんだよ。俺には紋章があるから平気だよ」

「だからって……」

転生者である上家竜二は、これから起きるスカルグレイモンのイベントをなんとか回避させようと思つての発言だったのだが。再び口を開けようとしたところ、突然肩に置かれた手に竜二は口を開くのを止めた。

(竜二、それ以上はいけない)

(霞……)

竜二の肩に手を乗せたのは、もう一人の選ばし子供であり転生者の霞だった。

竜二と霞はお互いに原作の知識を持っているため普段は原作通りに行動しているが、竜二が原作のシリアス部分を回避させようとする<sup>と決まって霞が邪魔する。</sup>

(原作は、原作。わたしたちは神たちによつて新しい命を貰ったんだから、無理に話を換えようとしなくて)

(わかっている。だけど俺は太一の親友として、あまり辛い思いをさせたくないだよ)

(それは貴方が勝手にやったことよ。本来は親友でなければ、赤の他人だから)

(だけど……!)

竜二と霞は互いに譲らない。

だが、二人の心配した出来事が突如として起きた。

「な、なんだ!？」

聞こえたのは太一の声。

その声を聴いた竜二と霞は突然の異変に一瞬驚くが、すぐに冷静になる。

「どうした、太一!」

「竜二、目の前に何か落っこちてきたんだよ」

「落っこちた?」

なんだそれは。原作にそんな話はなかったぞ。竜二は太一の視線の先を追うと、太一の言うとおりの目に何かがあるが、砂煙が発生して前が見えないでいた。やがて砂煙は晴れると、そこには一つの巨大な岩があった。

「い、隕石でも降ってきたのか」

「それにしても大きいですよ」

それを見た丈さんや光子郎は思い思いに声を上げたが、あれが隕石としては大きすぎるし、原作にこんなイベントはなかった。それにここはデジタルワールドであるため、これが本当に隕石であるかわからない。

だとしたら、あれはデジモンである可能性が高い。

そこまで思考した時、岩に異変が起きた。

「我、汝らの相手をせん」

「しゃ、しゃべった!？」

岩が声を発したことに驚く選ばれし子供たち。

そして、岩はそのまま自身の体ほどある石を投げていきなり襲いかかった。

「!いけ、ドルモン。みんなを守れ!」

「メタルキャノン!」

すぐに反応したのは竜二だ。

ドルモンは竜二の指示で岩のデジモンに、必殺技の“メタルキャノン”を複数放つ。メタルキャノンで投げられた石を全て破壊し、そのまま岩のデジモンにも命中させた。だが、メタルキャノンの直撃を受けたはずの岩のデジモンはその体に傷一つ付けていなかった。



「なに!？」

「我、汝の攻撃は効かぬ」

岩のデジモンは何事もなかったように言った。

「レイジロック」

岩のデジモンは両手の間に自身の体より岩を形成すると、その岩を太一に向けて放った。太一に迫る巨大な岩。太一のピンチにデジヴァイスが輝き、アグモンがグレイモンに進化した。

「ふんっ！」

グレイモンは岩のデジモンが放った岩を両手を使い受け止めた。

「いいぞ、グレイモン！反撃だ！」

太一の指示でグレイモンは手に持つ岩を投げ返した。流石に自身の攻撃は効いたのか岩のデジモンはのけ反った。その隙を見逃さまいと、グレイモンはすかさず必殺技を畳み掛ける。

「メガフレイ——がつ！」

「グレイモン！」

メガフレイムが放たれる瞬間。グレイモンの体が爆発した。

「シャツハハハハハーツ！図体デカいから全弾命中したぜ!!」

「……………だれ！」

霞がそう返した時には、声の主は姿を現していた。

手には銃を持ち、体には防弾チョッキとヘルメットを被っている。

体の色は完全に迷彩だが姿形はどう見てもアグモンだ。

「あれって、アグモン？」

「だああれが、アグモンだ。俺はコマンドラモン様よ！」

「コ、コマンドラモン？どう見たってアグモンじゃないか」

「うるせえぞ、このガリメガネ雰囲気野郎！」

「どおわ！」

丈の足もとにコマンドラモンが発砲した。

「コマンドラモン。どうして私たちを襲うのよ」

「ああ？それは命令があったからに決まってるだろ」

「命令って、お前。さてはエテモンの仲間か！」

俺たちを問答無用に攻撃してきたことっては、それはエテモンの指

示による可能性が高いのはわかる。が、竜二や霞はその可能性を否定していた。自分たちが転生したことで多少話が変わるのは重々承知していたが、それはあくまでもデジモンアドベンチャーという作品内での話。コマンドラモンというデジモンは登場していない。だとすると、コマンドラモンに命令をしたのはイレギュラーの存在かもしれない。

「エテモン？知らねえよ、そんなデジモン」

コマンドラモンの答えは竜二や霞の予想通り、エテモンの命令ではなかった。

「とりあえず、俺がすることは——テメエら全員、倒すことだよ！行くぜ、ゴツモン（X）！」

「我、了解した」

コマンドラモンは再び発砲し、ゴツモン（X）と呼ばれる岩のデジモンも攻撃を再開した。転生者は岩のデジモンがゴツモン（X）と呼ばれたことに多少の驚きもしつつも今は自分の身を守ることを優先した。選ばれし子供たちはそれぞれ（タケルを除く）自分のパートナーデジモンを進化させる。ガブモンはガルルモン、テントモンはカブテリモン、ピヨモンはバードラモン、ゴマモンはイツカクモン、パールモンはトゲモン。ドルモンはドルガモンに進化した。

霞のパートナーのルナモンもレキスモンに進化する。

「いって、レキスモン」

「ガルルモン、お前も続け！」

遠距離から攻撃するコマンドラモンにはレキスモンとガルルモンの素早いデジモンが相手をすることにした。レキスモンとガルルモンは、自慢の脚力でコマンドラモンとの差を一気に埋める。

「喰らえ、フオックスファイヤー！」

「ティアーアロー！」

ガルルモンは口から青い炎、レキスモンは腕から光の矢をそれぞれコマンドラモンに放った。が、コマンドラモンに当る直前に二つの攻撃は消えてしまった。

おかしい。コマンドラモンにそんな技があるわけない。

パツと見た感じ、あれは軍人そのもの。銃や手榴弾を身に付けている点から、あのデジモンは射撃戦を重視している筈。なら、あの攻撃は？

次の瞬間、コマンドラモンによる手榴弾がガルルモンに襲った。爆発による余波を受けたレキスモンはコマンドラモンによる攻撃を受けてしまう。二体は体勢を立て直すためコマンドラモンと距離を置く。

だが、コマンドラモンとの距離を取った瞬間、二体に再び衝撃が襲い掛かった。

コマンドラモンによる攻撃じゃない。

新しい敵がまた現れた。

しかも現れたのはデジモンだけではない、黒い服を着た子供と思わしき人間も一緒に現れたのだ。

無論、知らない人間。原作にも存在しない人間だ。

「いててて……コクワモン（X）め、下手に落とすやがったな」

「マスター、それは貴方の運動能力が低いから着地に失敗しただけです」

位置が遠くて会話が聞こえないが、隣のデジモンはおそらく彼のパートナーデジモンだろうか。

「あれは、人間か？」

「見た限りそうみたいですが、油断しない方がいいみたいです」

人間だからと言ってもあれが味方であるかわからない。それに、原作に存在しない人物ということは転生者かイレギュラー、そのどちらかの筈。前者であるならまだ事情を話せばらくであるが、後者であるなら非常に厄介だ。

ならば、簡潔に相手に聞いてみればわかるかも知れない。

ガルルモンとレキスモンはすでに体勢を立ち直して、コマンドラモンと向き合っている。

だから、私は彼に聞くことにした。

「ねえ、聞こえてる」

「ん？」

聞き返すは黒い服の子供。どうやら声は届いたらしい。

遠くて分かりにくいのが、彼の隣にはベタモンがいた。ベタモンとはまた変わったデジモンをパートナーデジモンにしているが、今はどうでもいい。

私が聞きたいことは。

「貴方は敵、それとも味方？」

「俺が敵か、味方か？ そうだな——」

あまり状況を読めていないのか、一度周りをきよろきよろと見渡す。

動きからして初心者か、彼はおそらく初めて転生されたというところか。だとしたら答えはおのずと“味方”と答えてくれる。彼は私たちと同じ側に入ることになる、すでに私を含めてもう一人いるから今更一人増えたところで対して変わらない。

「——俺は、敵だ」

……………え？

「コマンドラモン、ベタモン（X）。お前たちは目の前にいるデジモンを相手にしろ。コクワモン（X）、お前はゴツモン（X）のところに向え。コカブテリモンがすでに援護している、加わってやれ。場合によっては例のプログラムを使っても構わないとゴツモン（X）に伝えろ」

「了解！」

霞たちの頭上に飛んでいたコクワモン（X）は返事をし、ゴツモン（X）がいる場所へものすごい速さで飛んでいく。太一たちのところからより激しい戦闘音がこちらまで届く。向こうも苦戦しているようだ。

「さて、と」

黒服の少年はヤマトと霞に振り返った。

「相手してやるぜ、ガキども。心してかからないと——すぐに死ぬぞっ！」

お前だってガキじゃないか……………！

霞は心のそこで思いながら、向かってくるコマンドラモンとベタモ

ンをヤマトと共に迎え撃つ。

## 第5話

霞とヤマトが襲い掛かるコマンドラモンとベタモンを相手する少し前。

ゴツモン（X）は太一たちを迎え撃った。

成熟期のデジモン六対成長期のデジモン一。

圧倒的に選ばれし子供たちが数でも力でも有利である。

勝負はすぐにつくと思う選ばれし子供たちだが、結果は予想の斜め行く出来事となっていた。

（何故だーあのデジモンは一体なんなんだよ!?!）

竜二が驚いたのは、ゴツモン（X）の異様な防御力にである。

進化してパワーアップしたグレイモンの必殺技“メガフレイム”がゴツモン（X）に効いていない。他にもバードラモンの“メテオウイング”、カブテリモンの“メガブラスタ”、イツカクモンの“ハープーンバルカン”、トゲモンの“チクチクバンバン”ドルガモンの“パワーメタル”が全てゴツモン（X）に命中するも、ダメージは与えてい。

「我に、汝らの攻撃は効かぬ」

その通りだ。竜二たちのデジモンの攻撃はゴツモン（X）に全くと言っていいほど効いていなかった。ただ、ゴツモン（X）にとっては実際のところ、攻撃が全く効いていないわけではない。選ばれし子供たちのデジモンがゴツモン（X）との相性が悪いだけなのだ。

例えば、グレイモンのメガフレイムは体が岩で出来ているゴツモン（X）に対して体が多少温まる程度であり効果がない。バードラモンも同じ理由だ。カブテリモンのメガブラスタは電気の塊を放つので、岩の体であるゴツモン（X）は電気を通さないので効果なし。トゲモンのチクチクバンバンは針が刺さらなくて効果なし。となると、残りのイツクモンとドルガモンの必殺技が有効に見えそうだが、ゴツモン（X）の体が堅すぎてダメージを与えるにまで至らなかったのだ。「太一、あのデジモン。私たちの攻撃が効いていないみたいよ」

「だったら、直接殴ってやればいいだけだ！いけ、グレイモン！」

グレイモンはゴツモン（X）に突っ込んでいく。ゴツモン（X）は必殺技レイジロックをグレイモンに放つが、グレイモンは角を使いレイジロックを粉碎した。

異様な防御力をもつゴツモン（X）だが、その攻撃力は通常のゴツモンよりも高いが成熟期を倒すほどの威力を持っていない。よって、ゴツモン（X）の攻撃には対処はできた。

「うおおおおおおお！」

グレイモンが雄たけびを上げながら角を突き出してゴツモン（X）と正面から衝突する。いくら圧倒的な防御力を持っていても、その重量はグレイモンより軽い。当然、グレイモンの突撃を受けたゴツモン（X）は後方に吹き飛んだ。

「どうだ！」

太一がガッツポーズをとる。グレイモンの一撃がゴツモン（X）に僅かながらも。ダメージを与えることに成功したのだ。

「む……我、油断した」

グレイモンの一撃を受けたゴツモン（X）は体勢を立て直すため体を起こそうとするが、如何せん体が通常のゴツモンと比べ圧倒的に大きすぎるため体を起こそうにも起こせれない。なんとか体を起こそうとするゴツモン（X）に、選ばれし子供たちはこの好機を見逃さなかった。

「そうはさせまへんで！」

体勢を立て直すとするゴツモン（X）に、カプテリモンが空からの奇襲にかかる。完全にゴツモン（X）の不意を突く一撃が、途中で止まった。

ゴツモン（X）が止めたわけではなく、カプテリモンが止める理由はない。第三者の介入である。

「な、なんや!？」

「……………」

第三者は返事をしない。ただ緘黙に、カプテリモンの角を掴んでいった。

ゴツモン（X）と比べ小柄のデジモン。体から角や爪を持っているところを見る限り昆虫型のデジモンだ。驚くことに、虫型のデジモンはその小柄の体格でありながらも、巨体なカブテリモンがゴツモン（X）に向けて放った一撃をこの虫型デジモンは片手で防いだのだ。それだけではない、片手でカブテリモンの角を抑えつつも、もう片手で重量級のゴツモン（X）を持ち上げた。グレイモンの全体重を掛けた突進でようやく吹き飛んだゴツモン（X）をだ。

「グレイモンの一撃でようやくダメージを与えたかと思ったら、また新しい敵か」

「あのデジモン、なんて力だ！」

虫型のデジモンはゴツモン（X）の体勢を整えさせると両手を使いカブテリモンを放り投げた。カブテリモンは放物線を描きながら砂漠の大地に叩き付けられた。その衝撃で、カブテリモンはテントモンに退化してしまった。

「テントモン、大丈夫ですか？」

「光子郎はん……」

テントモンは力を使い果たしたのかその場に倒れ込む。

「汝、礼を言う」

「……………」

選ばれし子供たちの状況がさらに悪くなった。ゴツモン（X）一体なら、まだ勝機があったかもしれない。あのデジモンは防御こそ高いがパワーが弱いので、少なくともデジモンたちのダメージは少なくて済んでいた。そこに力の強い虫型デジモンが現れたことで状況が一変。虫型デジモンはカブテリモンを現れてから一瞬で倒してしまった。その力はゴツモン（X）よりも高い。

（くそ、グレイモンが完全体になってくれれば。こんな奴ら……！）

太一は胸に揺れるタグを掴む。だが、何も反応しない。この状況でもグレイモンは進化することはできないのだ。

そして、状況が更に悪い方向へと進んでいった。

「よお、ゴツモン（X）、コカブテリモン。助太刀に来たよ」

敵が更に増えた。今度はスタンガンのようなクワガタデジモン。



空からやってきたクワガタのデジモンはゴツモン（X）と虫型のデジモン、コカブテリモンの傍に降りる。

「汝よ、何しにやってきた」

「助太刀と伝言。あのプログラム、使っていいらしいよ」

「了解した。汝らよ、手を出すな」

「助太刀にきたのに？これじゃただの伝言係じゃん。俺にも少し戦わせてくれよ」

「好きにするがいい」

「よっしゃ！コカブテリモン、選手交代」

「……………」

コカブテリモンは手を上げクワガタのデジモン、コクワモン（X）とハイタッチを交わす。

コカブテリモンが下がったことで選ばれし子供たちが安堵の表情を浮かべるが、まだ油断はできない。いきなり現れたコクワモン（X）も相当強いに違いない。

「初めまして、選ばれし子供たちさん。俺はコクワモン（X）、こっちの岩のデジモンがゴツモン（X）、こっちの一切話さない緘黙な奴はコカブテリモン。ま、短い間よろしく」

「よ、よろしく……………じゃないわよ！何で今になって挨拶するのよ!？」

「ん？だって初対面だし。出会ったら挨拶を交わすもんだろ」

「マジメか！」

思わず選ばれし子供たち全員がツツコミを入れてしまった。

「私たちの言葉がわかるのよね？どうして私たちを襲ったりするの？」

「ん、俺から言わせてもらえば。まだ、俺は戦ってないので襲ってないけど？」

「そういうことじゃなくて！」

空の質問に、どこか間違った回答をするコクワモン（X）。なかなか話が進まない。それを思ったのか、転生者である上家竜二が空に代わってコクワモン（X）に問いかける。

「確かコクワモン（X）って言ったよな。俺たちを何で攻撃するんだ、

エテモンの差し金か？」

あくまでも自然に聞く竜二、コクワモン（X）は簡潔に答えを返す。  
「エテモンの差し金じゃない。というか、俺たちはエテモンなんてデジモンを知らないから」

「（つまりエテモンの手下じゃないのか……）だったら、何で俺たちを襲う」

「だから、俺はまだ襲っていないと」

「お前じゃなくて、その隣！と隣のデジモンだ！」

「あ、そういうこと」

コクワモン（X）の頭部のスタンガン部分に電気が走る。

「それは、俺たちの戦闘データと貴方たちの戦闘データを取るためです」

「俺たちの、データ……？」

「詳しいことは俺にはわからん。全ては荒喜しか知らないからな」

「荒喜？誰だそいつは」

荒喜という名前に聞き返す竜二。

そんな人物は原作に存在しない。だとすると、荒喜という奴は転生者か？

「答える義理はない。俺たちにはどうでもいいことだ——俺は、お前たちと戦うだけだしな」

「!!」

途端にコクワモン（X）の雰囲気は穏やかなものから冷ややかなものに一変する。コクワモン（X）の隣に立つゴツモン（X）も同じような雰囲気。ただ、コカブテリモンは参加をしないのか緘黙に二体の後ろに佇む。

「ゴツモン（X）、プログラムを使え。一気に蹴散らすぞ」

「汝に、同意する」

コクワモン（X）とゴツモン（X）は静かに前に出ると手の上に何かを持っていた。四角いデータの塊のようなもの。コクワモン（X）とゴツモン（X）はそれを——自らの体に押し込んだ。選ばれし子供たちはその光景に目を見開くが、次の瞬間、その表情は驚きのもの

に変わる。

「う、嘘でしょ……！」

データを体に押し込んだコクワモン（X）とゴツモン（X）に光の柱が発生した。その光は選ばれし子供たちこれまで何度も見たことがある——進化の光と同じように見えた。

光の柱が収まりなくなったときには、コクワモン（X）とゴツモン（X）の姿形が変化していた。

「コクワモン（X）進化、クワガーモン（X）!!」

「ゴツモン（X）進化、モノクロモン（X）!!」

目の前にいたコクワモン（X）とゴツモン（X）は、パートナーもなしに進化した。

## 第6話

「あいつら、デジヴァイスもなしに進化しやがった……!!」

本来、デジモンは数多の戦いを繰り返すことでデータを活性化させて進化している。選ばれし子供たちの場合はデジヴァイスの聖なる力によって一時的な進化を行っているに過ぎない。アグモンたちが自力で進化するには長い年月を容易なければならぬ。

しかし、目の前にいるコクワモン（X）とゴツモン（X）は長い年月戦ったわけでもなければデジヴァイスによって進化したわけではない。何か道具を使うことで自らを強制的に進化させたのだ。

進化した姿は、選ばれし子供たちがファイル島で見かけたクワガーマンとモノクロモンと似ていた。クワガーマン（X）はファイル島にいたのと比べ頭部はとどころが鋭く尖っており、クワガーマンの最大の武器と言える巨大なハサミはより攻撃的な形に変化している。

モノクロモン（X）、こちらはファイル島のと比べ些細な変化はないが……一っだけ異様に変化している個所があった。それは角だ。ファイル島にいたモノクロモンの角はサイのように短いものだったが、モノクロモン（X）の角が巨大となり鉤状になっている。その大きさはモノクロモン（X）の体よりもデカい。

「さあ、第二ラウンドだ！」

クワガーマン（X）は背中中の羽を広げ飛んだ。その上空にはバードラモンがいる。

バードラモンは迫りくるクワガーマン（X）に必殺技のメテオウィングを放った。いくつもの炎の塊がクワガーマン（X）に襲い掛かる。が、コクワモン（X）の時よりもスピードが上がったクワガーマン（X）は全てを躲した。バードラモンは距離を離そうと翼を羽ばたかせるが、クワガーマン（X）は速かった。あつという間に追いついたクワガーマン（X）はバードラモンの懐に入ると巨大なハサミでバードラモンを捉える。

「シザーアームズ！」

クワガーマン（X）の必殺技がバードラモンを締め付け、バードラ

モンはピヨモンに退化してしまう。

「ピヨモン!?!」

「空、危ない!」

空から落ちてくるピヨモンを受け止めようとする空に、モノクロモン(X)が巨大な角を突き出して突進してきた。

「させるか!」

これにはイツカクモンも自身の角でモノクロモン(X)の角に対抗する。

ダイヤモンド並みの硬度を持つモノクロモン(X)の角対レアメタルの一つミスリルでできた硬度を持つイツカクモンの角。一見、良い判断に見えるがそれは間違いだ。

ダイヤモンドとミスリル、硬度はモノクロモン(X)の方が高いのだ。しかも、モノクロモン(X)は通常のモノクロモンと違い硬度はダイヤモンドをゆうに超えている。元々堅い角がより硬くなったのだ。つまり元々の硬度が勝っているモノクロモン(X)の角を受け止めようとするイツカクモンの角は一瞬の硬直の後に破壊された。

「ぐわあああああ!」

「イツクモン!」

角を切られたイツカクモンにモノクロモン(X)は自らの巨大な角を振り上げ必殺技を放つ。

「……トマホークスマッシュ」

モノクロモン(X)の一撃を受けたイツカクモンは、進化の力を使いはたしゴマモンに退化した。

「そ、そんな……!」

クワガーモン(X)とモノクロモン(X)。

たった数秒でバードラモンとイツカクモンを倒してしまった。残るはグレイモンとトゲモンとドルガモンの三体。数はまだ多いが、実力が違いすぎる。このままでは選ばれし子供たちに勝ち目はない。(くそっ!俺はこのまま見ていることしかできないのか!)

そんな中、転生者である竜二は内心はとても悔しかった。

なにもできない自分が、見ていることしかできない自分が、仲間を

守ることができない自分が、とても悔しかった。神から貰った特典は三つ。一つは原作に関する知識、これはゴツモン(X)が現れた時点で原作が変わってしまったのですでに役立たない。二つ目はパートナーデジモンをドルモンにすること、これは今さら考えたところでどうしようもない。そして三つ目は太一の同級生として転生すること、これが今一番役に立たない願いだ。……なんでもっと考えなかった！

竜二が悔しがっていても、状況は刻々と進んでいく。

モノクロモン(X)はグレイモンとトゲモンを薙ぎ払い。クワガーモン(X)は巨大なハサミでドルガモンを締め上げる。デジモンたちがどンドンやられていた。ついにはトゲモンまでパルモンに退化した。数は二体二、このままでは勝機がない。

(一体、どうすればいいんだよ……!!)

竜二がそう考え込んだ時、異変が起きた。

「おい、お前たちの相手はグレイモンだけじゃねえぞ！」

「太一!？」

太一は何を思ったのか、グレイモンと対峙するモノクロモン(X)との間に割って入ったのだ。砂漠に転がっていた石を手に、モノクロモン(X)に投げた。もちろんモノクロモン(X)には効いていない。太一の目的はモノクロモン(X)の目標を自分に変えることだ。これまで、デジモンたちが進化するためには様々な条件があった。一つは大量のエネルギーが必要であること。もう一つは——パートナーが危機におちいった時。太一は今まさにそれをやろうとしていた。

自らを危険にさらすことで。

「太一、逃げろー！」

竜二の言葉を太一は無視する。

グレイモンを助けるための太一の行動は一つの勇気と言えるかもしれない。しかし、その行動はコロモンたちを助けた時のような無心の勇気じゃない。グレイモンを完全体に進化させるための不純な勇気。

何個目かの石がモノクロモン(X)の目元に当たる。流石のモノク

ロモン（X）もグレイモンから太一に視線を変えた。

「……汝よ、戦いの邪魔をするな」

モノクロモン（X）が石を投げってくる太一に角を向けた。戦いを邪魔する太一を先に始末しようと考えたからだ。すでにグレイモンの体力は限界。つまりグレイモンが太一に助けることが出来ない状況。太一は迫りくるモノクロモン（X）の角におもわず目をつぶった。死ぬかもしれないと覚悟したからだ。

その時、太一の胸に揺れるタグに不穏な光が宿り始める。

\* \* \* \* \*

一方、霞とヤマトたちの方もピンチに陥っていた。

「残念だ」

荒喜は目の前の惨状に吐き捨てるように言った。

ガルルモンにレキスモン。二体の成熟期は一体のデジモンに苦戦を虐げられていた。

「ハーハッハハハハハッ！弱い、遅い、歯応えがねえ！そんな力で俺に勝てるか？あぁあ！」

声を上げるのはコマンドラモン。否、先ほどまでコマンドラモンだったデジモン。全身を防弾チョッキが覆い、右手にナイフ、頭部には可変式スコープを取り付けている。コマンドラモンの進化した姿、シールズドラモンだ。手に持つナイフを回しながら声を上げていたのだ。

「くっ！」

そこにレキスモンが氷の矢ティアーアローをシールズドラモンに放つ。氷の矢はすぐにシールズドラモンとの距離を縮めるがシールズドラモンはナイフで全ての矢を払いのける。その隙にレキスモン空高く跳躍しシールズドラモンに自慢の脚力を使った“ムーンナイトキック”を繰り出した。

迫りくるレキスモンの攻撃にシールズドラモンは空いている左手でレキスモンの足首を掴みそのまま砂漠に勢いよく叩き付ける。技

が避けられたことと足が埋められたことに驚くレキスモン。対してシールズドラモンはレキスモンの空いた腹部に容赦なく蹴り飛ばした。

「ぐはあっ!?!」

「レキスモン!」

ガルルモンが疾風の如き速さで吹き飛ばレキスモンを背中を受け止める。退化はしていないもののレキスモンの体力は限界である。レキスモンを上手に地面に下ろすと、今度はガルルモンがシールズドラモンに飛びつく。

ガルルモンの尖った牙がシールズドラモンに当たる直前、ガルルモンの視界からシールズドラモンの姿が消える。宙を切ったガルルモンは少し動きを止めると、下から衝撃が襲ってきた。ガルルモンの下に潜り込んだシールズドラモンの掌打を喰らったのだ。ガルルモンの体が一瞬浮き上がり、シールズドラモンは頭部に付いている可変式スコープで相手の急所を計測する“スカウターモノアイ”でガルルモンの急所を見抜き、そこに右手のナイフで一閃した。必殺技の“デスビハインド”だ。ガルルモンはガブモンに退化し、その場で力尽きる。

それまでの始終を見ていた荒喜は呆れたように二人に言った。

「さっさと諦めたらどうなんだ? お前たちのデジモン如きじゃシールズドラモンを倒すことはできん」

「……まだ、終わっていない!……!」

「威勢がいいのは買うが、お前のデジモンはすでに戦える状態じゃないだろ。俺のシールズドラモンはいまだ健在だ。それに加えベタモン(X)も………いる」

「マスター!? なんですか今の間は!」

「今のお前らに、勝ち目があると思っっているのか?」

「無視をしないで下さい!」

確かにこの状況では霞たちに勝ち目はなかった。ガルルモンはガブモンに退化してしまい、レキスモンは体力が残り少ない。成熟期二体でも攻撃を当てることができなかつたのに、唯一戦えるレキスモン



では例え攻撃が当たったとしてもシールズドラモンには大したダメージにはならない。

「……………どうして？」

「ん？」

「貴方は、どうして私たちを襲ったりしたの？」

霞の疑問は当然のものだ。本来、パートナー同士でデジモンを戦わせることに意味などない。それはデメリットしか存在しないからだ。「そうだな、質問には答えてやるか。俺がお前たちを襲ったのはこいつ等の戦闘データとお前ら選ばれし子供たちのデータを集めるためだ」

「戦闘データ……………そんなもののために、私たちを襲ってきたっていうの!？」

「当然だ、何事もデータがなければ物事は決まらないからな？」

「ふざけないで！」

当然の様に答えた荒喜に、霞が激怒する。そんなもののためにデジモンを戦わせ、傷つけ、原作を崩壊させたというこの男の言葉に。霞は拳に自然と力を入れる。と、そこで荒喜が思い出したように顔を傾げた。

「そういうえば、お前に似た顔をどっかで見たような気がするな……………なあ、お前って弟とかいたりするの?」

「……………弟が一人、いた」

「いた? まるで今はいない様な言い方だな」

「……………ええ、私と一緒に転生したんだけど、私は現実世界に、弟がデジタルワールドに転生されちゃってね。私はこの旅で弟を探しているのよ」

「なるほどな。ちなみに名前は何ていうんだ?」

「……………小宮。弟の名前は小宮星之。私は姉の小宮霞」

「小宮? 小宮星之……………くっくくくくく!」

「何が可笑しいの! 私と似た顔を見たことがあるんでしょ? 弟と会ったことがあるの!？」

「ああ、会ったことある」

「いつ、どこで会ったことがあるの？ 教えて！」

切羽詰まった様に尋ねる霞に、荒喜は醜悪な笑みを浮かべ言い放った。

「殺してやったよ。お前の弟は、このデジタルワールドで死んだ」

「……………え？」

## 第7話

霞の旅の目的は弟を探すことであった。

霞は弟の星之と一緒に交通事故に遭い死んでしまったが神の恵みによって二人とも奇跡的に転生することができた。二人は仲良くデジモンを決めた。弟の星之はコロナモンを、姉である霞はルナモンをパートナーにデジモンの世界にやってきた。しかし、そこで一つの問題が起きた。到着先がそれぞれ別になってしまったのだ。霞は無事現実世界に転生できたが、弟の方はデジタルワールドに転生されてしまった。幸いなのは、デジヴァイスを通して連絡が取れたこと。最初は連絡を取り合ってた二人だったのだが。ある日突然、星之からの連絡がこなくなった。しばらく経っても連絡は来ず、いま現在でも連絡を取ることが出来ない。心配になった霞は、サマーキャンプに参加してデジタルワールドに行くことを決意した。全ては弟と出会うために。会って現実世界に戻るために。会って、元の世界より仲良く暮らすために。

「星之が、死んでいる？ なにを、言っているの……?」  
だから、認めたくなかった。

長年探していた弟が死んでいるだなんて。出会えると思つてこの世界に来たのに。すでに死んでいるだなんて思いたくない。

きつとこれは夢なんだ。砂漠を歩いているうちに倒れてしまって夢をみているんだ。なら、早く目覚めてほしい。こんな非情なことが現実なんか起こっているわけがないから。

「嘘はやめて。星之が死んでいるわけがない!」

目の前の男が言っていることは出鱈目だ。星之が死んでいる筈がない!

「こちらのを言うことをどう捉えても構わんが、嘘は言っていないぞ? 俺は、小宮星之とそのパートナーデジモン、コロナモンを過去に殺したことがあるだけだ」

「!!」

星之だけではなく、パートナーであるコロナモンも殺した。

二人で決めたパートナーデジモン知っているということは、彼の殺した人物は紛れもなく私の弟の星之であることがわかる。

(コイツが星之を……殺した?)

そう理解した瞬間、霞の心の奥底から怒りが膨れ上がる。

「……ゆるさない」

沈めていた顔を上げ、男を睨み付けた。視線に気づいた荒喜はより一層醜悪な笑みを浮かべる。が、今の霞にはその表情すら怒りの火種にしかならなかった。

「何を、ゆるさないんだ?」

「お前が、星之を殺したことを——絶対に、ゆるさないっ! レキスモン!」

霞の声に反応してレキスモンが飛び上がった。高さは先ほどの倍以上、空中で体を翻し必殺技のムーンナイトキックを放った。

レキスモンが飛び上がったと同時にシールズドラモンも動く。シールズドラモンは、レキスモンのムーンナイトキックの軌道の上に立った。先ほどと同じようにレキスモンの足を掴んで再び地面に叩き付ける寸法だ。可変式スコープで間合いを詰めるレキスモンの姿を確認し、シールズドラモンは構えた。ムーンナイトキックを放っているレキスモンの足首を掴もうとして——空を切った。

「あぁ!」

驚くシールズドラモンに、いくつかの衝撃が襲い掛かる。それは、レキスモンが放った氷の矢がシールズドラモンに命中したからだ。レキスモンはシールズドラモンに足を掴まれる直前、砂漠に向けてティアーアローを放った。レキスモンの足を掴もうとしたシールズドラモンの手は空を切ったのだ。その時、レキスモンはシールズドラモンのその頭上を飛び、がら空きの背中にティアーアローを撃つことで、シールズドラモンに攻撃を当てることが出来た。

流星のシールズドラモンも後ろの攻撃を予測することはできない。しかも、シールズドラモンの唯一の弱点であった背中に直撃したので、シールズドラモンは砂漠に倒れた。

シールズドラモンを倒したレキスモンはすぐに跳躍し、相手との距

離——荒喜との距離を一気に詰める。レキスモンと荒喜との距離が一メートルを切ろうとしたとき、二人の間に緑の物体が飛び込んだ。

「マスターに手は出させませんよ!? くらえ、”電撃ビリビリ185V”——ツ!!」

割って入ったのはベタモン(X)だった。荒喜を守るように前に出たベタモン(X)は必殺技である電撃ビリビリ185Vを使う。

だが、

ビリビリ、ビリビリ、ビリビリ、ビリビリ……………。

「……………」

ここで一つ補足させて貰うと、ベタモンの必殺技である電撃ビリビリは、体から電流を空気中に流して相手を感じさせる必殺技である。つまりは電気を放出する技である。本来、ベタモンの必殺技の電撃ビリビリの電圧は実に100万ボルトの威力を持っている。対して、ベタモン(X)の電撃ビリビリ185Vは通常のベタモンが使う必殺技よりだいぶ劣っている。数値で表すならば、約5400分の1程の威力しかない。それを砂漠で使ってみればどうなるか? 答えは、電流は放出されずベタモン(X)の周りに軽く静電気が生じるだけ。

「……ティアーアロー」

レキスモンがボツソと呟いて氷の矢をベタモン(X)に放ち。

「マスターああああああああああ……………!?!」

ベタモン(X)は砂漠の空の彼方に飛んでいった。

その飛んでいく姿を見ながら、荒喜は小さくため息を吐いた。

……………なにをやっているんだ。

荒喜は視線を前に戻すとレキスモンが目の前まで移動した。流石は兎。見事な脚力というべきだろうか。迫りくるレキスモンの腕が荒喜の服を掴もうとしたとき、レキスモンの腕が弾かれる。

「!!」

腕を弾かれたレキスモンは、すぐにまた荒喜を掴もうと腕を伸ばす

がその腕すらも弾かれてしまう。

「やれ」

荒喜の眩きにレキスモンを弾いていた何か、レキスモンに無数の傷をつけながら吹き飛ばした。レキスモンはダメージの限界でルナモンに退化する。飛んできたルナモンを霞は受け止めた。そして、荒喜の方を睨んだ。正確にはレキスモンの腕を弾いた何かを。

その何かは、一つの鎌みたいな形だ。それは荒喜の腰の辺りから伸びている。腰から伸びていた鎌がどんどん縮んでいき、荒喜の後ろから出てくる。鋭く尖った鎌の次に出てきたのは、ピンク色の物体であった。最初は細かったピンク色の物体は出てくるにつれて肥大化していき、巨大な筋肉の塊となっていく。筋肉の塊はどんどん出ていき、それはやがて一つの肉体となり姿を現した。

霞は驚く。そのデジモンは、存在自体を許されない悪魔のデジモン。ましては、自分たちでは勝つことが出来ないほどの力を持ったデジモン。

鋭く尖った鎌を両手両足に備え、ピンク色の肉体は血管が浮き出るほどに発達した巨大な筋肉を持ち。その顔はどす黒く全てを破壊する頑固たる意思を秘める目を持った、最凶最悪のデジモン。

「さーて、ベタモン（X）は後でコクワモン（X）に回収させるとして……目標のデータを

奪うとするか。行くぞ——

——アルカデイモン」

\*\*\*\*\*

（ちくしょう、イベントを回避できなかつた！）

最悪だ。竜二は心の底から思った。

スカルグレイモンのイベントは、何とか回避したかったイベントの一つだった。転生当初は所詮アニメの中だなと感じていた竜二だったが、実際に太一たちと出会い、その考えは変わった。たとえアニメの世界だろうが彼らは生きている、俺とやら変わらない人間だ。だから竜二は、太一を悲しい思いをさせないためスカルグレイモンのイベントを回避したかった。コロシウムで起きるイベントが砂漠に変わってしまったが、何も悪いことだけではなく良い誤算もあった。

「シザーアームズ！」

「……トマホークスマッシュ」

強靱なハサミと鉋状の角がスカルグレイモンに向け放たれる。空中から迫りくる赤いハサミを、スカルグレイモンは肉のない手を振るうことで簡単にあしらった。足もとからやってきた巨大な角も、スカルグレイモンは問答無用で殴り飛ばした。成長期の状態ですら苦戦した相手を、スカルグレイモンはたった一撃で弾き飛ばした。ましては、成熟期となつているクワガーモン（X）とモノクロモン（X）の必殺技を受けても怯まない程である。

「グオオオオオオオオオオオオ!!」

スカルグレイモンの咆哮が砂漠全体に響く。体を大きく仰け反り、背中に付属されている生体ミサイルの目が光り出した。重々しい音を立てながら、生体ミサイルが空高く撃ちあがろうとした。

「みんな、伏せろー！」

生体ミサイルがスカルグレイモンを離れた時点で、竜二は叫んだ。竜二の声を聞いた選ばれし子供たちは咄嗟に身を伏せる。すると、一瞬静寂し、そして。

ズドオオオオオオオオオオオオンツ！

砂漠の大地にドーム状の爆発が起きた。

スカルグレイモンの必殺技である“グラウンド・ゼロ”、一瞬にして全てを破壊する最強の技。選ばれし子供たちから遠い地点で爆発

したものの、爆発の余波と砂が襲ってくる。そんな中、竜二は砂が目に入らぬよう薄く目を開け、爆発の中心地——グラウンド・ゼロの直撃を受けたデジモンたちを見た。クワガーモン(X)、モノクロモン(X)共に退化はしていないようだが大分ダメージを受けているようだ。

(このままスカルグレイモンがアイツらを倒してくれれば……ん?)

スカルグレイモンがクワガーモン(X)、モノクロモン(X)に近づこうと足を一步踏み出そうとしたとき、空が一瞬光ったように見えた。気のせいかと思ひ竜二は再び空を睨み付ける。

刹那、異変はすぐに起きた。

移動しようとしたスカルグレイモンが突如、ものすごい衝撃音を響かしながら後ろに倒れた。あの巨体が一瞬にして、だ。驚く選ばれし子供たち、その驚きは急に倒れたスカルグレイモンと、目の前に現れたデジモンと黒い服を着た子供がいたからである。

(俺と霞以外にデジタルワールドに子供だと!? だとすると、コイツは……?)

いきなり現れた子供。荒喜操練の登場に竜二は睨み付けるが、荒喜は気にすることなく、無視をして隣に佇むパートナーデジモンに指示を出す。

「やれ」

荒喜の言葉にピンク色のデジモン、アルカデイモンが動き出す。

予備動作なしの跳躍でスカルグレイモンとの距離をすぐに縮める。鋭く尖った鎌をスカルグレイモンに振るい、スカルグレイモンの顎を切り上げた。スカルグレイモンは反撃しようと強靱な手を振るうが、どれもアルカデイモンには当たらない。逆に、アルカデイモンの攻撃は全てスカルグレイモンに当る。何発目かの攻撃で、ついにスカルグレイモンは倒れてしまう。倒れたスカルグレイモンにアルカデイモンは近づき、右手の鎌をスカルグレイモンの額に突き刺した。ドクドクと鎌からアルカデイモンを結ぶ触手が脈打ちスカルグレイモンは呻き声を上げ、体から黒い煙を上げながらアグモンにへと退化した。

「アグモン……!?!」



アグモンの元へ行くこうとする太一を竜二が止める。

「行くな、太一」

「竜二、何でだよ！」

「まだ、アイツがいる」

竜二に言われ太一の視線はアグモンから、荒喜に移る。

「おい、お前が荒喜か？ アグモンに何をしやがった？」

「答える義理はない。言った所で、お前が理解するとは思えんからな」  
「なんだと!？」

「太一、落ち着け！」

竜二は太一を落ち着かせると、再び荒喜を見る。その瞳に僅かばかりの殺気を込めて。

「アグモンに何をした……？」

「答える義理はないと言ったが？ お前らはそんなことも記憶できないほどに、頭が悪いのか？ だとしたら残念だな。選ばれし子供たちというのは頭が残念な奴らばかりだと」

(コイツ……!!)

流星はコマンドラモンのパートナーというべきか。先ほどいたコマンドラモンより口が

悪い。

「ま、コクワモン(X)辺りが勝手に話したと思うから一応答えておこうか？ 俺の目的は戦闘データの収集だ。これで満足か？」

「どうして、俺たちを襲う必要なんかあるんだ！」

「選ばれし子供たちのデジモンは、通常のデジモンと違うからな。データを収集するには良い対象なんだ」

「良い対象、だと……!？」

「お前、それだけのために俺たちを襲ったのか！」

「そうだが、それ以外に何がある」

太一の怒りに荒喜はあっさりと答えた。さも当たり前かのように。  
「さて、回収作業も終わったからそろそろ退場させてもらおうか。俺も、暇じゃないからな」

そう言った荒喜の後ろからはクワガーモン(X)が姿を現し、その

背中には退化したゴツモン（X）、コカブテリモン、疲れ果てている緑色のデジモンが乗っていた。荒喜が太一たちの前に姿を現したのは、ベタモン（X）を回収するための時間稼ぎのためである。そうでなければ、態々姿を現そうともしない。

理解した竜二が逃がさないとばかりにドルモンに荒喜を逃がさないよう指示を出そうとしたとき、荒喜の後ろから防弾チョッキを着こんだデジモンが現れる。

「シャーハツハハハハハハハハハハ!? テメエらは大人しく、その場でくたばありやがあ

れええええええ!!」

シールズドラモンの銃が火を吹いた。

選ばれし子供たちの前に砂塵が舞い、視界が塞がる。砂塵が収まるころには目の前からは荒喜とそのデジモンたちは姿を消していた。

\* \* \* \* \*

「うくん、やっぱり荒喜さんは凄いな。あのスカルグレイモンを倒しちゃうなんて」

双眼鏡を通してみた一部始終を見て、ポツリと呟いた。

「まっ、荒喜さんと選ばれし子供たちを比べたら、月とスツポンぐらいの差があるからしかたがないかな?」

「ん? 月とスツポンとは何だ?」

パートナーデジモンが尋ねると、答えを返す。

「そっか、デジモンは月もスツポンも知らないんだっけ。簡単に言えば、荒喜さんと選ばれし子供たちでは実力に差があるっていう意味だよ」

「ん、なるほど。わかりやすい」

パートナーの答えに満足すると、再びパートナーに尋ねた。

「では、俺の力だと。どのくらいいけるんだ?」

「そうだね……今の僕たちの実力じゃ、精々3、4人位かな」

「そうか……」

「しかたないよ、君の力はまだ大きくないんだ。焦らず、じっくりと、確実に力をつけていけばいいんだよ僕たちは」

「……わかつている。俺とて馬鹿じゃない、今は言われたとおりに行動するさ」

「うんうん。それでこそ、僕のパートナーデジモンだね。荒喜さんと戦えるよう力をつけようか、頑張ろうね——」

---

コロナモン♪」

## 第8話

「よっと、やっと到着か」

クワガーモン(X)で移動しながら数分。荒喜は砂漠地帯を越え、森林地帯に居た。荒喜はクワガーモン(X)から降りるとデジヴァイスを向けた。デジヴァイスの光がクワガーモン(X)に降り注ぐと、クワモン(X)が選ばれし子供たちの前で使用したプログラムが取り出されクワガーモン(X)がクワモン(X)に退化する。

「うう……、やっぱり強制的に取られる感覚には慣れないな」

「我慢しろ。元々お前らはデジヴァイスでの進化ができないんだ」

俺が復元させたデジモンたちは俺のパートナーデジモンであるがデジヴァイスを使用した進化はできない。デジヴァイスでの進化は本来のパートナーデジモンであるアルカディモンでしか行えない。そのため、俺が復元させたデジモンたちはデジヴァイスによる進化ができないのだ。

だが、進化ができないわけではない。本来デジモンとはデータの塊だ。データの量によってデジモンは進化を行える。データの量が増えれば成長期は成熟期に進化することができる。また、進化を行う場合は各段階ごとにデータの量が増加するので、完全体や究極体の数が少ないのは進化に必要なデータが膨大すぎるのが理由だ。

まあ、要点をまとめるとデジモンが進化するにはデータが必要であるということだ。

今回クワモン(X)たちが進化にしようとしたプログラム、あれは進化に必要なデータを圧縮した塊だ。名づけるならば進化プログラムver成熟期、通称“EP(成熟期)”である。EP(成熟期)を使えばデジヴァイスの力がなくとも自力で進化することが可能となった。欠点を上げるならば、データが多量に必要であるのとデジモンに多大な負担が掛かるということだ。何故負担が掛かるのかと言えばEP(成熟期)はデジモンを強制進化させるからだ。

強制進化をさせると本来自然進化するデジモンの体に進化するために必要なデータが溢れてしまう。例えるなら、コップに水をずっと注ぐ

のを想像してほしい。途中までコップの中にある水の量はコップ内に収まるが、水の量が多くなると水がコップから溢れてしまう。これをデジモンに置き換えると本来の容量を超えるデータを取り込むと、溢れたデータの処理でデジモンの動きが遅くなってしまふのだ。データの多量に関しては言わずもがな。

「さて、今回はデータの回収が目的だ。さっきの戦闘で使ったE P分のデータは最低でも回収しろよ?」

「ああ? なんでもんあメンドクサイことをしなきゃならねえんだよ。まだストックがあるだろうが」

「ストックがあれば使つていいと誰が言った? 自分の分は自分で稼げ。少なくとも俺がお前らのデータに合うように圧縮しないと、お前らは進化することができないんだ。口より手を、足を、体を動かしやがれ。特にペタンペタンはな」

「何故、私だけピンポイントに!? それに名前が変わってる!」

「チツ、わかったよ稼げばいいんだろ、稼げば。……ペタンペタン野郎もな」

「了解、俺も進化した分は稼ぐか。……ペタンペタンも頑張れ」

「承諾した。我も戦うとする。……ペタンペタン、お主もな」

「…………… (ペタンペタンの肩? に手を乗せる)」

「なんで皆して私の名前がペタンペタンになっているんですかあ」

だって一番活躍してなかったじゃん?

!!!!!!?????

\*\*\*\*\*

デジモンたちは各々データ回収に向かった。

効率を重視して二班に分けた。コマンドラモン、ゴツモン(X)、コクワモン(X)のチームと、俺、コカブテリモン、ベタモン(X)のチームだ。データは今の段階だと成熟期のデータを集めるのが効率が良いので、俺たちは今森の中で成熟期のデジモンを探していた。

「マスター、一つ聞いてもいいでしょうか?」

「なんだ?」

隣を歩くベタモン（X）が尋ねる。

「選ばれし子供たちでしたか？ 彼らのデータを取るため戦ったとマスターが言いましたが、それは我々の脅威になるからでしょうか？」  
「たぶんな、奴らは戦えば戦うほど強くなるってタイプだからな。今の内にデータを採取しとけばどんな風に成長したか、強くなったかわかるだろう？」

「なるほど」

選ばれし子供たちというのをゲームの主人公と置き換えればわかりやすいだろう。主人公は冒険をして、敵を倒して仲間が強くなる。彼らは限りなくゲームの主人公だ。今はまだまだ弱いがいずれは成長して今の何倍も強くなるだろう。

だが、

「俺がそれを超える成長をすればいいだけだ」

相手が強くなるなら俺も強くなればいい。倒せないなら倒せるようにすればいい。諦めないなら諦めるようにすればいい。相手が正義だというならば、俺が最高の悪者として葬ってやろう。

敵として、介入者として、悪魔と契約した者としてな。

「……………」

「お、いたのか」

先頭にいたコカブテリモンがデジモンを見つけたようだ。森の奥から複数の羽音がこちらに近付いているのが聞こえ、姿を現す。

黄色い体からは毒々しい羽が生え、尾には突いた相手を毒に犯す針を持っている昆虫型デジモン、フライモンが飛んできた。

「フライモンか……」

数は数十匹、データの回収には十分だろう。

「マスター、ここは私が行きましょうー！」

「コカブテリモン、進化して一瞬で片付けろ」

「マスター!？」

「……………（コクツ）」

コカブテリモンは一度頷くとEP（成熟期）を使い、光の柱に包まれたコカブテリモンの姿が変わっていく。昆虫独自の持つ肉体が鋼

の硬度を持つ機械的な肉体に変わり、コカブテリモンの角が一振りの刃物へとなる。

「シャアアアアアアアアアアア!!」

「……………」

複数のフライモンが進化したコカブテリモンに、毒の尾を打ち出す“デッドリーステイング”を放った。毒の尾が荒喜に迫るが、一瞬にして消滅した。

「シャアア!!」

自慢の必殺技がいきなり消滅したことにフライモンが驚きの声を上げたが、その声はすぐに消える。コカブテリモンの進化した姿、ブレイドクワガーモンが一瞬にして倒してしまったからだ。成熟期であるブレイドクワガーモンは小型のデジモンであるが、機動力と刃の切れ味に関しては他のデジモンと比べても飛び出ているのだ。フライモンの放ったデッドリーステイングもブレイドクワガーモンが移動して切り裂いたのだ。驚きの声を上げたフライモンも、驚きの声を上げる前のフライモンもブレイドクワガーモンにとっては遅すぎで認知する前に倒すことが可能だ。

「マスタ〜！　なんで私が戦ったらダメなんですか!」

「だまれ、陸雑魚。お前なんて“ベタリヤー”でしか役に立たないんだ」

「陸雑魚!!　それは酷すぎませんか!　私は元々水の中で戦うデジモンなんですからしかたないでしょう!　あと、ベタリヤーってなんですか!?!　もしかして、私を盾にすることですか!?!」

「正解だ、良く分かったな?」

「マスタ〜!!」

ベタモン（X）は戦闘要員ではなくツツコミ要員として鍛えた方がいいかもしれないな。

……………メンバー的な問題で。

「マスタ〜、理由を!!　理由を言ってくれませんか!」

「うっさい、黙れ」

「マスタああああああああああああ……っあ!?!」

ベタモン(X)がうるさかったので後ろの茂みに向けて投げると、先ほどから茂みに隠れていた奴に見事当たった。

森に着いてからずっとつけているのはわかっていたので放っておいたが、いい加減めんどくさくなったのでベタモン(X)を投げつけたのだ。

……決してベタモン(X)がウザかったからといって投げたわけではない。

「いたたたたたた……一体何が」

「おい、さつさと起きやがれ」

「へぶうー!」

茂みに近づくとベタモン(X)とコウモリっぽいデジモンがいてので、とりあえずコウモリっぽいほうを蹴り飛ばした。

「な、なんですか貴方ぶつ!」

「顔を上げるな、骸骨コウモリモン。何でさつきから後をつけていたのか教えてもらおうか?」

「が、骸骨コウモリモンですと!? 私の名前はピコデビモンです!

貴方に近付いたのは、実はいい話しがございましてえ!」

「いらねえよ、そんな話」

骸骨コウモリモン(自称:ピコデビモン)の頭? をより踏みつける。

大抵こういういい話しには裏がある。後ろからつけていたことから、どう考えてもこいつは俺のことを利用しようと考えている筈だ。

俺が話しを断ると案の定、骸骨コウモリモンが慌てる。

「そ、そんな!? 困りますよ! お願いですから話しを聞くだけでも!」

「やだね、お前の話を聞く必要なんてない。行くぞ、ベタモン(X)」

「へぶるうー!」

骸骨コウモリモンの近くで同じように倒れていたベタモン(X)を蹴り上げ、この場を離れる。

てか、コウモリ野郎と似た声を上げるんじゃないよ。

俺がさつさとその場を離れようとすると、骸骨コウモリモンが前に



飛び出た。

「邪魔だ」

「ちよつとだけ、ちよつとだけでいいですから！」

「……………」

……………うぜえ。

「ここまでしつこいといい加減に消してやろうか？　だが、こんなデジモンのデータはいらないしな……………しかたない。」

「なら、ここらで完全体クラスのデジモンが多くいる場所を知らないか？　答えてくれるなら話しを聞いてやるよ」

「完全体クラスのデジモン……………」

骸骨コウモリモンは考える素振りを見せるが、特に害とは思わなかったのかすぐに顔を上げた。

「それでしたら、この先の渓谷にいるマンモンですかね」

「マンモンか……………」

「ええ、しかも最近では新しいボスが出たとかで、かなりの数のマンモンがいるらしいですよ？」

確かマンモスの姿をしたデジモンだったな。以前二、三度倒したことがあるが、中々良いデータがとれる。だが、俺が見たことがあるのは一体や二体だけだ。それがかなりの数がいるということは、良いデータがかなり取れる……………！

「それじゃ、情報を渡したので私の話を聞いてくれますね？　実はですな……………」

「よし、行くぞお前ら」

「えっ!？」

俺はベタモン(X)、退化させたコカブテリモンと共にマンモンがいる渓谷に向かおうとすると前に現れて邪魔をする。

「なんだ、俺はこれからマンモンがいる渓谷に行くんだ。邪魔をすんな」

「ちよつと!？　さっきと話が違うじゃないですか！　私の話を聞いてくれるんじゃないかなかったですか!？」

「俺は確かに話しを聞くとは言った。だが、俺は話を“全て聞く”と



ト型デジモンヴァンデモンの姿であった。

「な、なんの御用でしょうか？」

『とぼけるな。森に入った選ばれし子供はどうなったのかと聞いているのだ。まさか、しくじったりしておらぬだろうな？』

「そ、それでしたらご安心を!! 森にいた選ばれし子供は私の与えた情報によって、ただいまマンモンのいる渓谷に向かっております！」

『ほう、マンモンのいる渓谷か……』

「はい！ あそこにいるマンモンは大変好戦的でありますので、あの選ばれし子供は終わったも同然です!!」

『そうか、では良い報告を期待しているぞ』

「ははぁー!!」

鏡の形のように集まっていたコウモリは空の彼方へと飛び去り、ピコデビモンはコウモリが完全に去ったのを確認し、その場で深いため息をする。

「ふう……、なんとか誤魔化せた。ま、結果的に見ればあの選ばれし子供は無事ではすまないだろう」

ピコデビモンは荒喜に訪れるであろう出来事を考えながら、その顔には笑みが浮かんでいた。

## 第9話

「そういうえば荒喜、俺たちはこれから何をやりに行くんだ」

クワガーモン（X）に進化しているコクワモン（X）が背中に乗っている俺に尋ねる。マンモンがいると思われる溪谷に行くためには、歩いていくには困難なためこうしてクワガーモン（X）に乗って移動している。ま、正直に言えば歩いて行くのが面倒だったただけだ。

ちなみに、他のデジモンたちはデジヴァイスの中に待機している。

「マンモンを狩りに行く」

「マンモン？ ……ああ、あの毛むくじやらのデジモンか」

毛むくじやら……まあ、合ってるけども。

「確か完全体か？ 別にマンモン以外の完全体でもいいんじゃないのか？」

「デジモンというのは進化をすればするほど強くなる。つまり、進化しているデジモンはそれだけでデータの質が良くなる。」

その中でもマンモンのデータは完全体の中ではかなり良質だ。サイズが大きい上に集団で行動する……下手に他の完全体を探すよりも、マンモンを探す方が楽なんだよ」

「そうなのか？」

「そうなんだよ」

クワガーモン（X）とそんなやり取りをしているうちに目的地に到着した。

さて、目的のマンモンはどこかな……？ ……おつ、いたいた。てか、

「思ってたより数が多いな」

数十規模のものだと思っていたが、あれは数百規模ぐらいか？

これは予想外、嬉しい意味で。

あれだけいればデータが……！ やばい、テンションが上がる！！  
「うあ……、荒喜が笑ってる」

『興奮しやがると相変わらず変な顔になりやがるなっ！』

『その顔は下品ですよ、マスター』

『汝よ、早めにやめた方が己のためだぞ』

『……………』

「おい、どうして俺の顔を見て引いているんだよ」  
皆して俺のいい顔を否定しやがって。

そしてコカブテリモン、お前は何か言え！

\* \* \* \* \*

「シャーーーーハツハハハハハハハハハハハハハハハハッ!! 雑魚は死にやがれ!」

「私の進行、止められん」

「……………」

「だからお前も何か言おうぜ!?!」

シールズドラモン、モノクロモン(X)、ブレイドクワガーモン、クワガーモン(X)の四体がマンモンの集団に攻撃を仕掛ける。

シールズドラモンはまず“スカウターモノアイ”でマンモンたちの急所を探した。だが、自分たちに近づいてくるデジモンにマンモンは、素早く気づいた。

マンモンとは遙か昔から存在している古代デジモン的一种だ。太古のデジモンであるマンモンは他のデジモンと違い太古の力を授かっている。その一つがマンモン仮面に刻まれている紋章だ。この紋章には遙か見通す、千里眼の力が備わっている。それに、マンモンの巨大な耳は遠くの物音も聞きもらさない。ゆえに、マンモンというデジモンとは無類の強さを発揮する。現に、マンモンは近づいたシールズドラモンの姿を逸早く発見することができたのだ。マンモンはシールズドラモンの動きを千里眼の力で感じ取る。鼻の横に生えている二本の巨大な牙で相手を串刺しにする必殺技“タスクストライク”、二本の牙がシールズドラモンの姿に重なり、そして――

「おせえよー!」

シールズドラモンのナイフが二本の牙を切り落とし、一体のマンモンを消滅させた。

『!?』

仲間が一瞬でやられたことで、マンモン達が動揺する。

その隙を逃すほどシールズドラモンや他のデジモンたちが逃すはずもない。

シールズドラモンは自身の必殺技ですでにマンモン達の弱点は見抜いている。シールズドラモンの戦法というのは基本的にはヒット&ウェイだ。相手の動きを読み、急所に一撃を与える戦いだ。たとえば完全体のマンモンであろうとシールズドラモンには追いつけない。追いつけないということは、シールズドラモンの動きを止めることはできないということだ。

他のデジモンでも同じことが言える。

モノクロモン（X）は他と比べ素早く移動することができずサイズも大きい。だがその代り、モノクロモン（X）には圧倒的な防御力がある。例え完全体であるマンモンの攻撃であろうとも傷一つ付かない。

クワガーモン（X）とブレイドクワガーモンも同上だ。

本来デジモンというのはそれぞれ長所と短所というのが存在するが、実は殆どのデジモンは土零のバランス型と言える。

マンモンで例えるでしょう、マンモンの長所は千里眼の力、短所は機動力だ。人が弱点を補うように、生物も同じように弱点を補う長所というものがある。短所である機動力は長所である千里眼の力で補うことができる。つまり短所である――の機動力は+である千里眼の力で土零となる。つまり、俺から言わせればバランス型だと言える。

対して俺のデジモンたちは違う。

俺のデジモンたちはXプログラムの影響もあつて本来のデジモンとはステータスが違う。先ほど述べたようにデジモンはバランス型だ、これを変えることは難しい。しかし、Xプログラムを組み込んだ俺のデジモンたちは同じバランス型でも中身が違う。簡潔に述べると……結果が同じであるならば、途中を弄っても問題ないだろうと考

えた。1―1〓〓0を10―10〓〓0にするように、+の長所をより強くし、―の短所をより弱くする。こうすることで、俺のデジモンの長所が伸びる。ゆえに、成熟期であるシールズドラモンたちでも完全体を倒すことは可能となる。

逆に短所をより弱くしたこと弱点を突かれるとかなりの痛手となる。例えばこの前、レキスモンがシールズドラモンに一撃を与えた時だ。本来のシールズドラモン、ここで述べている本来というのは通常のシールズドラモンのことだ。Xプログラム使用していないシールズドラモンであつたならばレキスモンの一撃を耐えることはできた。しかし、Xプログラムでステータスを弄られたシールズドラモンは攻撃力と機動力を上げた変わり、防御力がものすごく引く。だからシールズドラモンの戦い方はヒット&ウェイという戦法になっている。

ちなみに、他のデジモンたちではモノクロモン(X)は機動力、ブレイドクワガーモン、クワガーモン(X)共に防御力が本来の時よりも低くなっている。

「デスピハインド!」

「ヴォルケーノストライク!」

「……………」

「だからお前も言えつての!! シザーアームズ!」

シールズドラモンのナイフがマンモンの体を切り裂き。

モノクロモン(X)の炎弾がマンモンを燃やし。

ブレイドクワガーモンの放つ空気の刃“エア―ナイフ”がマンモンに突き刺さり。

クワガーモン(X)のハサミがマンモンの体を切断する。

この調子ならすぐに終わるだろう。

残りのマンモンの数もだいぶ少なくなってきた。

それと、ベタモン(X)は戦闘に参加していない。理由? 邪魔だからに決まっているだろう? それ以外に何か?

『うう……、どうせ僕なんて、どうせ僕なんて……………』

「あー……ベタモン(X)?」

『どうせ……水の中でしか僕は役立たないんだ、しかも水のある場所の筈なのに水が殆どないなんて……酷い……酷い……酷い……あんなに……』

「……………」

なんだろう、掛ける言葉が見つからない。

……しかたがない、放っておこう。

視線をベタモン(X)の入っているデジヴァイスから視線を変える……ん？

マンモンの動きが変わり出した？ さっきまでバラバラだった動きに統一性が見える。これらの動きは何かしらの指示がない限り自然界では起きないような動きだ。それをマンモンがしだしたということとは、ようやくか。

「おい、さがれ」

「あああああ!?! 何でだよ!」

「む、主よ説明を求めろ」

「……………」

「だから何か言えよ!」

「どうやら……敵のボスが出てきたようだ」

俺の言葉にシールズドラモンたちが辺りを警戒する。

するとタイミングを計ってたようにマンモンたちが左右に道を開け、その奥から、マンモンたちのボスが現れる。

「……………おいおい、マジかよ」

俺は目の前に現れたデジモンに呆れた声しか出なかった。

何故なら――

「愚かなる人間よ、我が仲間これ以上手を出すのであれば――  
貴様を葬り去ってくれよう!」

マンモンたちの長。

マンモンすらも超える巨体に、全身を覆うようにして生える太い骨。

生えている牙はそこいらのデジモンは一突きで葬れる禍々しさを感ずる。



マンモンたちの長、スカルマンモン。  
完全体を越えた——究極体デジモンだ。

## 第10話

### ——究極体

デジモンの進化形における最終形態。

デジモンの進化には六段階ある。

1. デジタマから誕生した状態を“幼年期Ⅰ”
2. 幼年期Ⅰが進化した状態を“幼年期Ⅱ”
3. 幼年期Ⅱが進化した状態を“成長期”
4. 成長期が進化した状態を“成熟期”
5. 成熟期が進化した状態を“完全体”
6. 完全体が進化した状態を“究極体”

1. 2.、状態をまとめて“幼年期”（幼年期Ⅰを幼年期前期、幼年期Ⅱを幼年期後期）と呼ぶ。幼年期の能力による差は殆どない。3. 4.、デジタルワールドの大半が“成長期”、“成熟期”と呼ばれるデジモンである。成長期のデジモンが一番多く、次に成熟期のデジモンが多い。5.、成熟期のデジモンが進化した“完全体”と呼ばれるデジモンは、成長期や成熟期と比べ極端に数が少なくデジモンの強さが一気に跳ね上がる。

だが、完全体を上回る“究極体”のデジモンはその限りではない。究極体は文字通り、究極の存在なのだ。たとえ進化前である完全体が何体もいようと究極体の前では無に等しい。それほどまでに、デジモンの進化というのは重要なのだ。

それは、例えば荒喜のデジモンであろうとも例外ではない。

「グハア！」

例えば、強力な隠密性を持つシールズドラモンでも

例えば、頑固な強度を誇るモノクロモン（X）でも

例えば、高い機動性を持つブレイドクワガーモンでも

例えば、強靱な鋏を備えるクワガーモン（X）でも

例え……陸では役に立たないベタモン（X）でも究極体であるスカルマンモンには——勝てない。

「フッー。所詮は人間如きに育てられたデジモン！ 我に勝てるわけがなからう!!」

スカルマンモンが荒喜を見下ろして言った。

スカルマンモンはこのようなデジモンに仲間がやられたのかと思うと今度は荒喜に怒りの矛先が向いた。

「人間よ、次は貴様の番だぞ！ 覚悟はいいか!？」

スカルマンモンは己の武器である二つの巨大な牙を突き出した。

全身が骨で出来ているスカルマンモンの骨の強度というものは非常に高い。現にシールズドラモンのナイフ、モノクロモン（X）の角、ブレイドクワガーモンの鋏、ブレイドクワガーモンの刃、ベタモン（X）が放つ電撃（?）をもつてしてもスカルマンモンの体には傷一つ付かなかったのだ。逆に巨大な牙による突進により多大なダメージを負ってしまったている。

彼らの能力はある点においては、完全体を凌駕できる力をもっている。だがしかし、所詮は成熟期のデジモンなのだ。どれだけステータスを弄ろうとも彼らは少なくとも成熟期というスペックの元で完全体を倒しているのだ。彼らのクラスは完全体の域に入っていると、言っても過言じゃないだろう。

まあ、だからといって、究極体に勝てないわけではない。今回の戦いでは、単純に相性が悪かったただけだ。

「覚悟、か……生憎、そういうものは持ち合わせていないな。この程度で覚悟する必要などないからだ」

「この程度、だと?」

「ああ。大体、少し弄ってあるとはいえ所詮は成熟期だぞ？ 究極体であるお前が倒せたとしても何ら不思議でもないだろ。ん……なあ、スカルマンモンよ。俺のデジモンになるつもりはないか?」

「なにっ!？」

スカルマンモンは驚きはするが、すぐにその顔は怒りに染まる。

「仲間だと? 巫山戯るでないっ！ 仲間をさんざん殺した貴様の仲

間になど、絶対になるわけがなからう！」

「おいおい、お前は何を言っているんだ？ 仲間だと？」

——俺がいつ、お前を仲間にすると言った

？」

「!?」

「俺はお前を仲間にするとは言っていない。何故なら、お前らのようなデジモンは俺にとつての手足みたいなものだ。手足を仲間にする？ 冗談を言うな。お前は俺の手足として動けばいい。ただ、それだけだ」

荒喜が言った一言により、突如場の雰囲気が変わった。

無表情だった荒喜の顔には醜悪の笑みが浮かぶ。

先ほどまで何も感じなかった人間が、いきなり豹変したことに戸惑いを感じるスカルマンモンであったが、それ以上に人間の言葉を聞いてはならないというスカルマンモンに備わっている千里眼の力が伝えていた。

「だ、ダメレエエエッ！」

これ以上、この人間の言葉を聞いていれば自身が狂ってしまうと感じとつたスカルマンモンは、再帰の言葉を遮るかのように自身の必殺技である“スパイラルボーン”を放った。スカルマンモンの背骨から飛ばされる二本の骨が高速回転しながら、攻撃の対象である荒喜に左右から放物線を描きながら飛来する。人間である荒喜は究極体であるスカルマンモンの攻撃を受けてしまえば一瞬で死んでしまうだろう。

やがて二本の骨は土煙を上げながら対象にへと衝突した。

スカルマンモンは荒喜の最後を見届けるかのように、自身の骨が帰還するのを待つ。

だが……………

「ん？」

おかしい。

飛ばされたはずの二本の骨が帰還しないのだ。本来、スパイラルボーンを放つと自身の元に戻ってくるブーメラン式の必殺技だ。人間に当たったのならそろそろ戻ってきてきても良い筈だ、まさか地面に深く刺さってしまったのか？ と考え込んだスカルマンモンであったが、次の瞬間、自身の考えが間違っていたことを深く知ることとなる。何故なら、スカルマンモンの体に突如として激しい痛みが走ったからである。

「グフツ！」

な、何故だ？ 何故この私が痛みなど……？

スカルマンモンの疑問に答えるかのように土煙から二つの影が現れる。

「なるほどな……この骨自体お前の体の一部なわけだから、当然痛みは伝わるよな？」

「なっ……!?!？」

土煙の中から現れたのは、荒喜と彼のパートナーデジモンであるアルカデイモンだ。スカルマンモンが放ったであろう二本の骨にはアルカデイモンの両手の鎌が突き刺さっていた。

「ぎ、貴様……!？」

「アルカデイモン」

荒喜の言葉に答えるように、アルカデイモンはスカルマンモンの骨を切り裂いた。スカルマンモンは再び体に襲う痛みを耐え切れず片足をついてしまう。

「スカルマンモン、お前は確かに強いデジモンであるが……俺のアルカデイモンには勝てれんぞ？ 本来はめんどくさくてしないのだが、あえてもう一度聞いてやろう——俺のデジモンに……いや、俺の手足になるつもりはあるか？」

「ふ、フザケルな……っ！ 誰が貴様なんぞの！」

「そうか……」

荒喜は身に付けていたデジヴァイスを取り出し、アルカデイモンに翳す。

「スカルマンモン、お前に敬意を表して今俺が出せる最強のデジモン

で相手をしてやろう」

翳したデジヴァイスから黒い光がアルカデイモンへと降り注ぎその身を包み込む。

「アルカデイモン——進化」

\* \* \* \* \*

マンモンのいる溪谷に一体のデジモンが向かっていた。

彼は移動をしながらため息をつく。

「まったく、ヴァンデモン様だったら。別に様子なんか見なくても結果なんてわかりますのに」

コウモリ型のデジモン、ピコデビモンは空を飛びながらそんなことを愚痴っていた。

彼にとっては確認する意味などないと思っっているのだろう。

私が行った策に死角などない。

私は、偶然を装うって選ばれし子供たちである荒喜繰練に近づいた。

他の選ばれし子供たちと比べ何かが違う感じはしていたが何も問題はなだろう。奴は仲間と行動をするわけではないから適当に道案内をする振りをしてマンモンのいる溪谷へと近付かせるつもりであった。

が、何故か気づかれてしまいそのうえ踏まれてしまい、拳句には蹴り飛ばされた。内心踏まれながら怒りが満ちていったが、ここで怒っては水の泡。屈辱を耐え忍び、なんとかマンモンのいる溪谷へと誘導することができた。

マンモンの気性は荒く、しかもあの溪谷には長であるスカルマンモンがいるのだ。

ヴァンデモン様が直々にお誘いしても断った怖いもの知らずの一体だ。

それに、選ばれし子供たちである奴は紋章を持っていないため完全体になることはできない。

いくら奴のデジモンが強くとも究極体であるスカルマンモンに勝てることなどできない!

「クククククッ……我ながらなんて完璧な作戦なんだろうか」

ヴァンデモン様のお喜びになる顔が目には浮かぶ!

そんな風に想像しながら飛んでいると目的地であるマンモンのいる渓谷に到着した。

「さてさて、選ばれし子供のデジヴァイスでも回収しましょうかね………つ!？」

渓谷に降りたピコデビモンの目に映ったのは、破壊されつくした渓谷だったものだ。

辺りを見渡してもマンモンと思わしきデジモンの姿は見えず、スカルマンモンがいた洞窟の奥にいても姿はなかった。

「二体どうなっている? マンモンが一体もないじゃないか……」  
それに大地を大きく抉っているこの溝は、もしやスカルマンモンの!?

馬鹿なっ! たかが選ばれし子供風情が紋章もなしにスカルマンモンを倒したとでもいうのか!?

「……なわけないか」

そんなことがあるわけがない。

きっと選ばれし子供は森で迷子にでもなっここへ来てないだけだ。

マンモンやスカルマンモンはどこかに移動しただけだろう……うん、きつとうそうだ、そうに違いない。

「さて、帰ってヴァンデモン様に報告しにいきましょうかね」

その後、ピコデビモンがお置きされたの言うまでもない。